

# 中国語“在”と日本語“カラ”の 対照研究\*)

成 戸 浩 嗣

はじめに

- 1.1 動作とトコロとの関係
- 1.2 トコロを示す「デ」の使用条件
- 2.1 心理的方向性を含む動作とトコロ
- 2.2 「在」, 「从」と動作の方向性
- 3.1 「デ」, 「カラ」と動作の方向性
- 3.2 「在」, 「从」と「デ」, 「カラ」との相違

はじめに

中国語の「主体+在・トコロ+V+客体」表現の中には、日本語で表現した場合、「在・トコロ」の部分「トコロ・デ」ではなく「トコロ・カラ」となるものが存在する。

例えば、

- (1) 他在飞机上看海。

---

\*) **Abstract** : When the subject at a certain LOCATION does an action to the object at another, the LOCATION as a source of action can be expressed by '在' in Chinese, while it cannot by 'デ' in Japanese, which is usually thought of as corresponding to the Chinese '在'. In the present paper, I claim that this follows from a usage condition on the Japanese 'デ', which states that it can be used only when both the subject and the object should be at the LOCATION. However, the Chinese counterpart has no such condition, although the LOCATION tends to be expressed by '从' (which is equivalent to the Japanese 'カラ') when the action has more directionality, and by '在' when it has less directionality.

- (2) 我们在山顶欣赏远处的风景。
- (3) “琳琳，猜，我在哪儿给你打电话？”
- (4) 他在桌子上抓了一把花生。
- (5) 前边停着一条帆船，在船头上牛鼻孔那样的地方垂着锚锁。
- (6) 他在像册里找着自己童年时的照片。

は、いずれも「トコロ・カラ」を用いて

- (1)' 彼は飛行機(の中)カラ海を見る。
- (2)' 私達は山頂カラ遠くの景色を楽しむ。
- (3)' 「琳琳，私がどこカラ電話をかけているかあててみて。」
- (4)' 彼はテーブルの上カラ落花生を一つかみ取った。
- (5)' 前方には帆船が，へさきの牛の鼻孔のようなどころカラ錨の鎖を下ろして停泊していた。
- (6)' 彼はアルバム(の中)カラ幼い頃の自分の写真を捜していた。

のような日本語の表現になるが、「トコロ・デ」を用いて

- (1)" \*彼は飛行機(の中)デ海を見る。
- (2)" ?私達は山頂デ遠くの景色を楽しむ。
- (3)" ?「琳琳，私がどこデ電話をかけているかあててみて。」
- (4)" \*彼はテーブルの上デ落花生を一つかみ取った。
- (5)" \*前方には帆船が，へさきの牛の鼻孔のようなどころデ錨の鎖を下ろして停泊していた。
- (6)" \*彼はアルバム(の中)デ幼い頃の自分の写真を捜していた。

とすると非文もしくは不自然な表現とされる。

中国語の「在」，日本語の「デ」が，いずれも動詞表現においてトコロを表わす成分に附加され，主体が動作を行なうトコロを示す機能を有していることは周知の通りであるが，それぞれの使用条件の相違により，「在」に

「デ」が対応しない場合が存在する。本稿は、日中両言語間の上記のような表現形式の相違が生ずる要因となる「在」, 「デ」それぞれの使用条件を明らかにし、さらに、「在」に対応する日本語の「動作の起点」を示す「カラ」と、通常「カラ」に対応するとされる中国語の「从」とを比較の対象に含めて、「動作が行なわれるトコロ」, 「動作の起点」が両言語でそれぞれどのように異なった捉え方がなされているかを明らかにすることを目的とする。

### 1.1 動作とトコロとの関係

(1)～(6)と(1)'～(6)'とを比較すると、以下のような相違が見られる。

(1)～(6)の下線部は、「在・トコロ」の形式によって主体が動作を行なうトコロとして表現されており、「在」で示されるトコロは、日本語の「トコロ・デ」の場合と同様に、述語動詞の表わす出来事の成立に直接的には加わらないものである<sup>1)</sup>。このため、主体から発せられた動作がトコロとの間に方向的な関わりをもつことはなく、動作がトコロに向かうか否か、或いは動作がトコロを起点とするか否か、ということは表現形式からは明白ではない。

一方、(1)'～(6)'における下線部は、「トコロ・カラ」の形式により、主体が動作を行なうトコロ、主体の客体に対する動作の起点としてのトコロ、のいずれの性格をも有する成分として表現されている。

渡辺義夫<sup>2)</sup>は、「見る」, 「言う」及びこれに類する一連の動詞には、具体的な移動の意味は含まれておらず、視線や音波を支えとした非具体的移動を思わせる心理的方向性が含まれているが、これらの動詞が「トコロ・カラ」と組み合わされた場合の名詞と動詞との結びつきを、「空間的な結びつき」の一種である「空間的方向性をもつ心理的な動作を表わす結びつき」であるとしている。そして、このような場合の「トコロ・カラ」は、動詞と結びついて心理的な動作を行なう主体の位置を表わすことがあるとしている。

また、荒 正子<sup>3)</sup>は、言語活動、視覚活動を表わす動詞が「カラ」格の名詞と組み合わせられる場合、名詞はこれらの活動が行なわれる場所を表わして動詞との間に空間的な結びつきをつくり、名詞の連語の中での働きは「デ」格の空間名詞に近づくが、話しかけられたり見られたりする対象は「カラ」が示す以外の空間にいるため、かざられ動詞の表わす動作が対象へ向かって働きかけるためには一定の心理的な方向をもたざるを得ず、かざりの位置から或る方向性をもって働きかけが行なわれるという点では「出発点 (or 出どころ) のむすびつき」<sup>4)</sup>と同様であり、方向性のニュアンスは保たれているとしている。荒は、このような名詞と動詞との結びつきを、「状況的なむすびつき」の一種である「空間的なむすびつき」に分類している。状況的な結びつきをとる名詞と動詞との組み合わせは、動作とその動作が成立する状況(時間・空間など)との関係を表わすが、名詞が表わすトコロは動作の成立に必要な成分ではないとされる<sup>5)</sup>。

(1)'の「見る」は視覚を用いた動作であり、(2)'の「楽しむ」は、それ自身は視覚を用いた動作ではないが、表現全体の内容から「眺めて(或いは見て)楽しむ」と言い換えることができるため、視覚を用いた動作に準ずるものであるということが出来る。また、(3)'の「電話をかける」は、言語活動としての「話す、言う」に準ずる動作である。従って、(1)'～(3)'に対しても渡辺、荒の考え方をあてはめることができる。(1)'～(3)'における下線部のトコロは、主体がそこに存在して動作を行なうトコロであると同時に、主体の客体に対する動作の起点としてのトコロでもあることは、渡辺、荒の考え方によって一層明白となる。

また、荒の考え方によれば、(1)'～(3)'においては、「カラ」で示されるトコロと動作との結びつきは状況的な結びつきであって、トコロは動作の成立に不可欠の成分ではないことになるが、この点では、(1)～(3)において「在」で示されるトコロと動作との結びつきと同様である。しかし、(1)'～(3)'の下線部におけるトコロは、主体の客体に対する動作の起点であり、動作との

間に方向的な関係を有するため、(1)～(3)の下線部におけるトコロに比べると、動作との結びつきはより緊密であるということになる。

(4)′は、主体が客体をトコロから取りはずすというコトガラを表わす。述語動詞は取りはずし動作を、「カラ」格の名詞は「ヲ」で示される客体が取りはずされるトコロを表わす。荒<sup>6)</sup>は、このような表現において「カラ」で示される名詞と動詞は、「対象的なむすびつき」の一種である「とりはずし場所のむすびつき」<sup>7)</sup>をとるとしている。対象的な結びつきにおいては、動作とその動作が成立するために必要な対象<sup>8)</sup>との関係が表わされるから、(4)′における下線部のトコロと動作との結びつきは、(4)の場合に比べてより緊密である<sup>9)</sup>ということになる。

(5)′は、主体が客体を下線部のトコロから別のトコロに移動させるというコトガラを表わす。述語動詞は、客体を空間的に移動させる動作を表わし、「カラ」格の名詞は客体の移動の起点を表わす。荒<sup>10)</sup>は、このような表現における「カラ」格の名詞と動詞との結びつきを、「空間的なむすびつき」の一種である「出発点のむすびつき」に分類しているが、「カラ」によって示される成分が客体の移動の起点を表わしている点で「とりはずし場所のむすびつき」の場合のそれと共通しているため、(5)の場合に比べると下線部のトコロと動作との結びつきはより緊密であるということになる<sup>11)</sup>。

(6)′は、主体がトコロに存在すると予測される客体を捜すというコトガラを表わすが、(4)′、(5)′の場合とは異なり、客体が動作によってその位置を変えるということがないため、(1)′～(3)′の場合と同様に、「トコロ・カラ」の存在により動作が一定の心理的方向性を有するということができる。荒<sup>12)</sup>は、このような表現におけるトコロと動作との結びつきを、(1)′～(3)′、(5)′の場合と同様に「空間的な結びつき」に分類し、トコロは「発見物の出どころ」を表わすとしている。(6)′においては、トコロと動作との間に心理的な方向関係が存在するため、両者の結びつきは(6)の場合に比べると、より緊密であるということになる。

以上のように、(1)′～(6)′においては、主体の動作が「カラ」で示されるトコロ以外の方向に向かってなされること、換言すれば、動作とトコロとの間に方向的な関係が存在することが表現形式から明白であり、動作とトコロとの関わりは、(1)～(6)におけるそれに比べてより緊密である。

これに対し、「主体＋在・トコロ＋V＋客体」表現の中には、例えば

- (7) 他在飞机上看电影。                      (8) 我在河里摸鱼。

のように、主体、客体のいずれもがトコロに存在し、動作とトコロとの間に方向的な関係が存在しない場合に用いられるものや、

- (9) 我在屋子里看见了一个人。              (10) 我在桶里捉鱼。

のように、客体のみがトコロに存在し、動作がトコロに存在する客体に向かってなされる場合に用いられるものが存在するため<sup>13)</sup>、この点からも「主体＋在・トコロ＋V＋客体」の形式をとる(1)～(6)は、動作とトコロとの間の方向的な関係を表わしてはいないといえることができる。

## 1.2 トコロを示す「デ」の使用条件

前節で述べたように、日本語の動詞表現において「デ」により示されるトコロは、述語動詞が表わす出来事との間に直接的な関わりをもたないという点において、中国語の動詞表現において「在」により示されるトコロと共通している。しかし、主体の客体に対する動作がトコロを起点としてトコロ以外の方向に向けてなされる場合には、(1)′～(6)′のように、「デ」によってトコロを示すことはできない。

「デ」が動詞表現に用いられて動作が行なわれるトコロを示すためには、① 主体がトコロに存在する、② 動作は主体の意志によるものであり、且つ、一定時間継続可能なものである、③ 動作はトコロに向かうものではな

い、という使用条件を満たす必要がある<sup>14)</sup>が、(1)〃～(3)〃はこれらの使用条件を満たしているにも拘らず自然な表現としては成立しない。

(1)〃が非文とされるのは、客体である「海」が「飛行機(の中)」に存在するというニュアンスを含み、実際には有り得ない内容を表わす表現となるからである。(2)〃も(1)〃と同様に、客体である「遠くの景色」が「山頂」に存在するというニュアンスを含み、実際には有り得ないコトガラを表わす表現となって不自然とされる。(1)〃、(2)〃における「海」、「遠くの景色」をそれぞれ「映画」、「桜の花」に置き換え、

(1)〃 彼は飛行機の中で映画を見る。(2)〃 私達は山頂で桜の花を楽しむ。

とすると、このようなコトガラは実際に有り得るため、自然な表現として成立する。

(3)〃においては、「電話をかける」という動作の相手「琳琳」が、主体とは別のトコロにいることは明白であるが、「トコロ・デ」を用いているため、「琳琳」がトコロにいるというニュアンスを含み、実際には有り得ないコトガラを表わす表現となって不自然とされる。

中川正之<sup>15)</sup>は、日本語では、仕手と受け手(本稿でいう主体と客体)が明確に仕切られた別の領域にある場合、トコロを表わす成分には「デ」ではなく「カラ」が附加されるとしているが、このことは換言すれば、「デ」が用いられるためには、主体、客体のいずれもがトコロに存在しなければならないということである<sup>16)</sup>。

(1)〃、(2)〃はいずれも、トコロを示す「デ」が、主体がトコロに存在すると同時に客体もトコロに存在することを暗示し、このことが表現内容と矛盾するために非文もしくは不自然な表現とされる。また、(3)〃における「電話をかける」は、「N・ヲVする」という形式をとってはいるものの、(1)〃の「海を見る」や、(2)〃の「遠くの景色を楽しむ」に比べて「N・ヲ」と「Vする」との結びつきがより強く、いわば全体で一つの動詞のような働きをするもの

であるため<sup>17)</sup>、「電話」が動作を行なう主体の位置するところに存在することは自明である。従って、(3)〃においては、(1)〃、(2)〃における「海」、「遠くの景色」に相当する成分は「電話」ではなく、動作の相手「琳琳」であると見るのが妥当である。(3)〃は、ところを示す「デ」が(1)〃、(2)〃の場合と同様に、主体、動作の相手のいずれもがところに存在することを暗示し、このことが表現内容と矛盾するために不自然な表現とされるのである。

(4)〃～(6)〃が非文とされるのも、(1)〃～(3)〃と同様の理由による。(4)〃～(6)〃の場合には、(1)〃～(3)〃とは反対に、客体はところに存在するか、或いは存在すると予測されるが、主体はところには存在しない。しかし、主体、客体のいずれもがところに存在するという「デ」の使用条件を満たしていない点では(1)〃～(3)〃と共通している。

ところで、中川<sup>18)</sup>は、

(11) 私は岸デ魚を釣る。

における「魚」は、実際に川や池などにいる具体的な魚と同一レベルのものではなく、「釣る」という動作に完全に取り込まれ、抽象的な概念を表わす成分となっているとしている。この場合の「魚を釣る」は「魚釣りをする」と同じで、「魚」は独立した一つの概念を表わしてはいない。中川はさらに、

(12) 彼は山頂デ星を観察する。

という表現例を挙げているが、この場合の「星」も、(11)における「魚」と同様に「観察する」という動作と一体になっており、「星を観察する」は「天体観測をする」と同じ内容を表わしている。(11)、(12)がいずれも自然な表現として成立するのは、客体を表わす「N・ヲ」が述語動詞と一体になっているため、上記の「デ」の使用条件に抵触しないことによる。

但し、

- (13) こっちデで見ていた漁夫たちは、思わず肩から力を抜いた。  
 (14) 黒い影が窓の外デ言った。

のように、述語動詞の表わす動作の向かう先（客体或いは相手）が表現中に明示されていない場合には「デ」を用いても差し支えないが、動作の向かう先は述語動詞と一体になっていないため、「カラ」を用いた方が better であるということになる。

以上のように、日本語の動詞表現においてトコロを示す「デ」が用いられるためには、主体、客体のいずれもがトコロに存在するという使用条件を満たしていなければならないのに対し、中国語の動詞表現においてトコロを示す「在」にはそのような使用条件はないため、「主体＋在・トコロ＋V＋客体」表現には以下のような多義文が生ずる場合がある。

- (15) 他在门口向我点了点头。      (16) 他在小船上拉着我的手。

(15)は、「彼は入り口のところカラ（部屋の中或いは外にいる）私に向かってうなずいた」、「彼は入り口のところデ（入り口のところにいる）私に向かってうなずいた」のいずれの内容をも、(16)は、「彼は小船上カラ（水の中にいる）私の手を引っ張った」、「彼は小船上デ（小船上にいる）私の手を引っ張った」のいずれの内容をも表わすことができる<sup>19)</sup>。

## 2.1 心理的方向性を含む動作とトコロ

動作の起点を示す日本語の「カラ」に対応するとされる中国語の成分としては、前置詞の「从」が存在するが、「主体＋在・トコロ＋V＋客体」の形式をとる(1)～(6)が表わすコトガラを「主体＋从・トコロ＋V＋客体」の形式により表現すると、以下ようになる。

- (17) 他从飞机上看海。

- (18) \* 我们从山顶欣赏远处的风景。  
 (19) “琳琳，猜，我从哪儿给你打电话？”  
 (20) 他从桌子上抓了一把花生。  
 (21) 前边停着一条帆船，从船头上牛鼻孔那样的地方垂着锚锁。  
 (22) 他从像册里找着自己童年时的照片。

(18) が非文とされる以外は、いずれも自然な表現として成立する。

(17) は、「在・トコロ」を用いた(1)よりも better な表現である。これは、「看」という動作が、「飞机上」から外の「海」に向けてなされるため、動作が行なわれるトコロを限定する「在・トコロ」よりは、動作の起点を表わす「从・トコロ」を用いた方が表現内容に合致するからである。(1)においては、「他」と「海」の両者が共に「飞机上」に存在することが実際には有り得ないため、動作が「飞机上」を起点とすることはおのずと明らかであるが、表現形式の上では、「在」で示されるトコロにおいて「看」という動作が行なわれることを表わすにとどまり、動作の起点は明示されていない。

また、例えば

- (23) ○他在窗口往外望过两眼。      (23)' ○他从窗口往外望过两眼。

においては、「望」が視線を遠くに向ける動作であり、かつ、動作の方向を表わす「往外」が存在するため、(1)、(17)を比較した場合と同様に、「在」を用いた(23)よりも「从」を用いた(23)'の方が better であるということになる。

さらに、動作の起点を明示した「主体+从・トコロ+V+客体」表現が、そうでない「主体+在・トコロ+V+客体」表現に比べ、動作に対する主体の積極性という点においてより優位にある場合が存在する。例えば

- (24) 我在飞机上看见了长江大桥。

は、「飛行機に乗っていたら偶然に長江大橋が見えた」という内容を表わし

ており、動作が「我」の意志によらないことを含意しているのに対し、

(24) 我从飞机上看见了长江大桥。

は、「我」がその意志によって「飛行機(の中)から長江大橋を見た」ことを含意している。このような相違が生ずるのは、「看」が意志的な動作であるならば、「我」は「長江大橋」に対して積極的に自らの視線を向けようと努めるため動作の方向性がより明白となるのに対し、無意志的な動作であれば必ずしもそのようなことはないためである<sup>20)</sup>。

ところで、

(25) \* 在山脚看上去，山顶上好象有个小亭子。

(26) \* 在火车的车窗里看到大海。

は視覚活動を表わし、動作の方向を表わす成分「-上去」，「-到」を含んでいる点で(23)と共通しているにも拘らずいずれも非文とされるが、これは、(25)，(26)が、それぞれ「山顶上」，「大海」のような動作の到達点を含んでいるためである。動作の起点，到達点の両方を含んだ表現は、(23)のような動作の起点だけ含んだ表現に比べて動作の方向性をより強く表わすことになるため、(25)，(26)のような「在・トコロ」を用いた動詞表現は成立しない。(25)，(26)はいずれも、「在」を「从」に置き換えると自然な表現として成立する。

(18)においては、客体である「风景」が「远处的」という連体修飾成分を伴っており、主体と客体との間にかなりの距離が存在することを表わしているため、動作が主体の存在するトコロを起点として「远处」に向かうことは明白である。(18)が、動作が主体の存在するトコロを起点として別のトコロに向かうという点において(17)，(23)′，(24)′との間に共通点を有するにも拘らず非文とされるのは、(18)における「欣赏」が、視覚活動そのものである「看」や「望」の場合ほどには、視線を支えとした心理的方向性を含

んでいないためである。換言すれば、(18)が非文とされるのは、方向性に乏しい「欣赏」という動詞が、主体と客体との間の距離の存在を前提とした「主体+从・トコロ+V+客体」表現に適合しないためである。

さらに、(18)は、非文ながら「欣赏」という動作が「山顶」から「远处」までの全ての風景に及ぶという内容を表わすが、これは、動作の起点を表わす「从山顶」の存在によって「远处」が動作の到達点としての性格を帯びるからである。実際には山頂から遠くまでの風景を全て視野に入れて眺めることも有り得るが、そのような内容を表わす場合には(18)ではなく、例えば

(18)′ 我们在山顶欣赏从近处到远处的风景。

のように「从～到～」の形式をとり、動作の起点と到達点とを明確に表わす表現としなければならない。

このように、(18)は、「我们」と「风景」との間にかかなりの距離が存在するにも拘らず動詞の方向性が弱いこと、「欣赏」という動作が、通常は「山顶」と「远处」との間の連続した全ての「风景」に及ぶよりも、「山顶」とは途切れた別のところである「远处」の「风景」に及ぶと理解されること、の二つの理由によって非文とされる。この点においては、日本語の「カラ」を用いた(2)′の表現例との間に相違が見られる。日本語の「カラ」は、(2)′が自然な表現として成立することからも明らかのように、中国語の「从」ほどには動作の方向性、あるいは主体と客体との間の空間的な連続性を要求しない。

(3)、(19)の両者を比較すると、前者の方が better である。言語活動に準ずる動作である「電話をかける」も視覚活動を表わす動詞と同様に心理的方向性（音波を支えとした）を含んではいるが、「从」を用いる場合は表現中に動作の方向を表わす成分を必要とするため、視覚活動を表わす動詞ほどにはその方向性は強くない。例えば(19)は、動作の方向を表わす「给你」が含まれているため自然な表現として成立するが、「给你」を削除すると不自然な

表現とされる。

また、

(27) 黑影在窗外说。 (27)' ? 黑影从窗外说。

(28) 母亲在隔壁发问。 (28)' \* 母亲从隔壁发问。

の場合には、「在」を用いれば自然な表現として成立するが、「从」を用いると非文もしくは不自然な表現とされる。これは、(27)', (28)'は「从」によってトコロを示しているにも拘らず方向を表わす成分を含んでいないため、動作の向かう方向が十分に明らかではないからである。(27)', (28)'は、例えば

(27)" 黑影从窗外向里说。 (28)" 母亲从隔壁向我发问。

のように、動作の方向を表わす成分「向里，向我」を加えると、いずれも自然な表現として成立する。

## 2.2 「在」, 「从」と動作の方向性

(4), (20)の両者を比較すると、(20)においては、動作がトコロを起点としていることが表現形式から明白であるのに対し、(4)においてはそうではない。このような相違は、言うまでもなく「在」と「从」のいずれによってトコロを示すかに起因するのであるが、「在」によってトコロが示されている表現であっても、以下のように述語動詞が方向補語を伴っている場合には、「从」によりトコロが示されている表現と同様に動作がトコロを起点としていることは明白である。

(29) 我在小炕桌上端起了灯。 (29)' 我从小炕桌上端起了灯。

(29), (29)'においては、述語動詞に方向補語「-起」が附加されているた

め、両者はいずれも動作がトコロから上に向かって行なわれること、換言すれば、動作がトコロを起点としていることが表現形式から明白である点で(4)、(20)とは異なる。(29)、(29)'から「-起」を削除すると、

(30) ? 我在小炕桌上端了灯。 (30)' 我从小炕桌上端了灯。

となる。「端」は、「両手でもつ、ささげる」という概念を表わし、それ自身は方向性が弱い<sup>21)</sup>、(30)のような「在・トコロ」を用いた表現においては、「持ち上げる」という移動を伴う動作を表わすことができない。しかし、(30)'のように「从・トコロ」を用いた表現においては、「从」が動作の起点を示すため、「从小炕桌上端了灯」の部分が「(オンドル用の)机の上からランプを持ち上げた」という動作を表わすことができるのである。

「端」に対し、「拿」を用いた場合には、方向補語を伴わなくても、以下のように「在・トコロ」、「从・トコロ」のいずれを用いた表現も成立する。

(31) ○两个人在盒子里拿东西。 (31)' ◎两个人从盒子里拿东西。

「拿」は「取る、持つ、手にする」という概念を表わし、「端」に比べると方向性が強い<sup>22)</sup>、単独でも(31)のような「在・トコロ」の表現に用いることができ、「在」によって示されるトコロが動作の起点であることが暗示される。但し、(31)、(31)'の両者を比較すると、「从・トコロ」を用いた(31)'の方が better である。

(29)、(29)'のように、述語動詞が方向補語を伴った表現例としては、

(32) ? 他在衣袋里掏出一张钞票来。 (32)' 他从衣袋里掏出一张钞票来。

が挙げられる。(32)は、「ポケットの中を探っておもむろに紙幣を取り出す」という内容を表わす場合には自然な表現として成立するが、そうでなければ非文とされるのに対し、(32)'は、「ポケットの中からサッと紙幣を取り出す」という内容を表わす。このような相違が生じるのは、「从・トコロ」を用い

た(32)′における方が、動作の方向性が強く表わされるためである。しかしいずれの表現例も、述語動詞が方向補語「-出来」を伴い、動作がポケットの中から外に向かって行なわれることを表わしているため、「从・トコロ」を用いた(32)′の方が better である。上記のように、(32)は「ポケットの中を探る」、「紙幣を取り出す」という二つの動作を前提とした表現であるのに対し、(32)′は「ポケットの中から紙幣を取り出す」という一つの動作を前提とした表現である<sup>23)</sup>。このことは、(32)が

(32)〃 他在衣袋里摸索一阵，掏出一张钞票来。

と言い換えられることによっても明白である。従って、(32)′における「衣袋里」と「掏出来」との結びつきの方が、(32)におけるそれに比べてより緊密であるということになる。

「在・トコロ」を用いた動詞表現において述語動詞が方向補語を伴っている場合、(32)のような場面設定が可能であれば自然な表現として成立するが、一般には以下のように非文もしくは不自然な表現とされる<sup>24)</sup>。

(33) ? 他在瓶子里抓出一把糖来。 (33)′ ○他从瓶子里抓出一把糖来。

(34) ? 他在那个盘子里抓过来点儿。 (34)′ ○他那个盘子里抓过来点儿。

(35) ? 他在口袋里拿出来十块钱。 (35)′ ○他从口袋里拿出来十块钱。

述語動詞が「-出来」を伴った(33)は、「瓶子」が口の大きいものである場合には、瓶の中に手を入れてアメを取り出すことができ、(32)の場合と同様に「瓶の中を探ってアメを取り出す」という場面が想定されるため、そのようなコトガラを表わす場合には自然な表現として成立する。これに対し「瓶子」が口の小さいものである場合には、上記のような場面を想定することができないため非文とされる。(34)、(35)も(33)と同様に、主体がトコロに手をやって客体を探り、しかる後に取り出すのであれば自然な表現として成立するが、そうでなければ非文とされる。

西横光正<sup>25)</sup>は、「从・トコロ」を用いた動詞表現の中には、「取得」の意味をもつ動詞が述語の中心語となっているものがあるが、このような表現に用いられる動詞（「取」類述語）は、「往・トコロ」を用いた動詞表現に用いられるいわゆる「放」類述語の場合とは反対方向の動作を表わすとしている。「往・トコロ」を用いた動詞表現は、動作がトコロに向かうことを明示するが、動作とトコロとの間の方向的な関係を表わすという点においては「从・トコロ」を用いた動詞表現と共通している。これに対し、「在・トコロ」を用いた動詞表現は、動作とトコロとの間の方向的な関係を表わさない。従って、「从・トコロ」を用いた動詞表現における方が、「在・トコロ」を用いた動詞表現に比べ、動作とトコロとの結びつきがより緊密であるといえることができる。

ところで、動作の起点は到達点の存在を前提としており、両者は相互に対立する概念であるため、「从・トコロ」を用いた動詞表現は、以下のように動作の到達点の存在を暗示する場合がある。

(36) 他在菜地里拔了几根葱。                      (36)' 他从菜地里拔了几根葱。

(36)'は、発話時には主体である「他」はすでに「菜地里」ではなく別のトコロ、即ち、葱を抜いた後に移動した先にいるというニュアンスを含んでいるのに対し、(36)はそのようなニュアンスを含んではない。また、

(37) 他在银行里取款。                                      (37)' 他从银行里取款。

の両者を比較すると、前者は一つの完成されたコトガラを表わす表現であるのに対し、後者は、例えば

(37)" 他从银行取了款，就去买东西了。

のように、別のトコロに移動して動作を行なうという内容の後件を設定することができるという点からも明らかのように、起点としての「银行里」に対

する到達点の存在を暗示すると同時に、「取款」の後にさらに次の動作が続くことをも暗示した表現である。この点では(36)も同様であり、(36)は、例えば

(36) 他从菜地里拔了几根葱，就拿回家了。

のように後件を設定することができる。

(36)、(37)は、「在」で示されるところに主体が存在する点において(33)～(35)とは異なるが、このような場合には述語動詞が方向補語を伴っていても、例えば

(38) 他在地上捡起来一根针。

(39) 他在废品堆里捡回来一件古铜器。

(40) 我在岸边儿把鱼捞了上来。

のように自然な表現として成立することがある。(38)～(40)のように主体がところに存在して動作を行なう場合には、動作の行なわれる範囲がところに限定されるため、(33)～(35)のように主体がところに存在しない場合に比べると動作の方向性は弱く、「在」によってところを示すことができる。但し、(38)～(40)は、動作が方向性を有する点では(33)～(35)と同様であるため、「从・ところ」を用いた

(38)′ 他从地上捡起来一根针。

(39)′ 他从废品堆里捡回来一件古铜器。

(40)′ 我从岸边儿伸手把鱼捞了上来。

と比較すると、後者の方が better であるということになる。

(4)、(20)を比較した場合とは異なり、(5)、(21)を比較すると前者の方が better である。即ち、(21)は述語動詞に「向下」を附加し、「向下垂着」としてはじめて安定した表現となるのに対し、(5)はそのような必要はない。

(5), (21)の述語動詞「垂」は、視覚活動を表わす(23), (23)'の「望」と同様に方向性を含んだ動作を表わし、本来的には「在・トコロ」よりも「从・トコロ」を用いた動詞表現に用いられる傾向がある。ただ、前述したように、「从・トコロ」を用いた動詞表現は、動作の到達点の存在を暗示するという性格を有しているため、動作の方向を表わす成分、動作の到達点を表わす成分のいずれもが含まれていない(21)は自然な表現として成立はするものの、「向下」のような成分を加えた方が、(23)', (27)', (28)'の場合と同様に表現としての完成度が高いといえることができる。これとは反対に、「向下」のような成分を用いないのであれば、上記のように「从・トコロ」よりは「在・トコロ」を用いた(5)の方が better であるということになる。

主体が客体をトコロから別のトコロに移動させるというコトガラを表わす表現においては、トコロは通常、以下のように「在」ではなく「从」によって示される。

(41) ? 他在列车窗口(向外)伸出 手来。 (41)' ○他从列车窗口(向外)伸出 手来。

(42) \* 他在屋子里搬了几把椅子。 (42)' ○他从屋子里搬了几把椅子。

但し、動作そのものを表わす(41), (42)とは異なり、(5)は状態を表わす表現であるため、方向性を明示する必要性が(41), (42)の場合ほどには強くなく、「在・トコロ」を用いても自然な表現として成立するのみならず、「从・トコロ」を用いた(21)よりもむしろ better であるということになるのである。また、

(43) 岳母鬼头鬼脑地在门背后将脖子一伸，朝这头张望。

は、「鬼头鬼脑地(=コソコソと)」という成分を含んでおり、「岳母」が「门背后」から外の者に見られないように行なう動作を表わしているため、方向性を明示する必要性が低く、「在」を「从」に置き換えることはできな

い。「从」を用いると、「身を乗り出すようにして首を伸ばす」という、動作の方向をより明確に示した表現となり、「鬼头鬼脑地」との間に意味上の矛盾を生ずる。(43)においては、動作はトコロの範囲内で行なわれるものとして表現されているのに対し、(43)の「在」を「从」に置き換えると、動作はトコロの範囲を越えて行なわれるものとして表現されることになる。

(6), (22)はいずれも動作の進行を表わす表現であるが、両者を比較すると「在」を用いた前者の方が better である。これとは反対に、

(6)''' 他在像册里找出了自己童年时的照片。

(22)' 他从像册里找出了自己童年时的照片。

の両者を比較した場合には、「从」を用いた後者の方が better である。「自己童年时的照片」は、(6), (22)においては「找」という動作の客体ではあるが実際には未だ見つかっていないのに対し、(6)''', (22)′においては見つかっている。このことは換言すれば、前者の場合には客体が存在するか否かは不明であるのに対し、後者の場合には客体は明らかに存在するという事である。従って、「找」という動作の方向性は、後者における方が前者におけるよりも強いことになり、前者の場合には「在」を用いる方が、後者の場合には「从」を用いる方が表現内容に合致するのである。

### 3.1 「デ」, 「カラ」と動作の方向性

1.2 で述べたように、日本語の動詞表現においてトコロを示す「デ」が用いられるためには、主体、客体のいずれもがトコロに存在しているという使用条件を満たす必要があるが、(11), (12)のように「ヲ」で示される客体が述語動詞と一体化している場合や、(13), (14)のように述語動詞の表わす動作の向かう先（客体或いは相手）が表現中に明示されていない場合には、上記の使用条件を満たさなくても「デ」によってトコロを示すことができる。

また、1.1で述べたように、(1)'～(6)'において「カラ」によって示されるトコロは、主体が動作を行なうトコロ、主体の客体に対する動作の起点としてのトコロ、のいずれの性格をも有する。動詞表現において「カラ」によって示されるトコロのこのような特徴は、(11)～(14)のような表現の存在によって端的に示される。

(11), (12)は、客体が具体的な概念を表わす成分ではないため、例えば

(44) 私は岸カラ大きな魚を釣り上げた。

(45) 彼は山頂カラ夜空の流れ星を観察している。

のように具体的な概念としての客体を含んだ表現におけるよりも動作の方向性が弱く、表現全体は「主体がドコデ動作を行なうか」に比重を置いたものとなっている。これに対し、(44), (45)においては、客体が具体的な概念を表わす成分であるため、動作の方向性は(11), (12)の場合よりも強く、表現全体は「主体がドコカラ動作を行なうか」に比重を置いたものとなっている。(11), (12)及び(44), (45)における下線部のトコロは、表現全体の内容から、動作が行なわれるトコロ、動作の起点のいずれの性格をも有していることが明白であるが、このように表現の比重の置き方が異なっている。従って、(11), (12)の「デ」を「カラ」に置き換えた

(11)' 私は岸カラ魚を釣る。

(12)' 彼は山頂カラ星を観察する。

における客体は具体的な概念を表わし、(44), (45)におけるような具体的な客体の存在を前提とした表現となる。

(13), (14)においては、動作の向かう先(客体或いは相手)が表現中に明示されていないため、動作の向かう先が明示されている(1)'～(6)'の場合よりも動作の方向性が弱く、表現全体は「主体がドコデ動作を行なうか」に比重を置いたものとなっている。(13), (14)の「デ」を「カラ」に置き換えた

(13)′ こっちカラ見ていた漁夫たちは、思わず肩から力を抜いた。

(14)′ 黒い影が窓の外カラ言った。

は、1.2で述べたように、(13)、(14)よりも better な表現であるが、これは、「デ」を用いた(13)、(14)においても、下線部とは別のところに存在する客体（或いは相手）の存在が暗示されるからである。(13)、(14)はいずれも「デ」を用いることにより、動作そのものに表現の比重が置かれた描写性の高い表現となっている。

### 3.2 「在」、 「从」と「デ」、 「カラ」との相違

中国語の「在・トコロ」を用いた動詞表現は、動作の方向が明示されていないという点において日本語の「トコロ・デ」を用いた動詞表現と共通しているが、1.2で述べたように、後者が成立するためには主体、客体のいずれもがトコロに存在するという使用条件を満たす必要があるのに対し、前者が成立するためにはその必要はない。「在・トコロ」を用いた動詞表現は、客体が「在」によって示される以外のトコロに存在する場合でも成立するが、表現中に動作の方向を表わす成分が含まれている場合は、(23)、(23)′及び(32)、(32)′のように「从・トコロ」を用いた表現とする方が better であり、到達点を表わす成分が含まれている場合は(25)、(26)のように非文とされる。

また、中国語においては一般に、「欣赏、说、发问」のような方向性が比較的弱い動作を表わす動詞は、「在」によってトコロが示される(2)、(27)、(28)のような表現に用いることはできるが、「从」によってトコロが示される(18)、(27)′、(28)′のような表現に用いることはできない。但し、(27)″、(28)″のような動作の方向を表わす成分を含む場合には、「从」によってトコロが示されていても上記の動詞を用いることができる。

これとは反対に、日本語においては、(2)′, (14)′或いは

(46) 母が隣の部屋カラ尋ねた。

のような「カラ」によってトコロが示される表現には、「欣赏, 说, 发问」に対応するとされる「楽しむ, 言う, 尋ねる」のような方向性が比較的弱い動作を表わす動詞を用いることができるが、「デ」によってトコロが示される表現にこれらの動詞を用いると、(2)″のように不自然な表現とされるか、(14)或いは

(46)′ 母が隣の部屋デ尋ねた。

のように、自然な表現として成立はするものの、「トコロ・カラ」を用いた方が better であるということになる。このことは、日本語の「トコロ・カラ」を用いた動詞表現は、主体のみがトコロに存在する場合に一律に用いられるのに対し、中国語の「从・トコロ」を用いた動詞表現は、主体のみがトコロに存在し、さらに動作の方向性が比較的強いものである場合に限って用いられるということを意味する。

2.2 で述べたように、主体が客体をトコロから取りはずすというコトガラを表わす場合、中国語の「在・トコロ」を用いた動詞表現は、(4), (31)のように動作が方向性を含んだものであれば、表現中に動作の方向を表わす成分がなくても自然な表現として成立する。これに対し、日本語の「トコロ・デ」を用いた動詞表現の場合には、(4)″や、(31)を日本語で表現した

(31)″ \* 二人は箱(の中)デ物を取った。

のように非文とされる。(4)″, (31)″は、述語動詞「取る」を、それぞれ「取り上げる」, 「取り出す」のような方向を表わす成分を附加した形式に改めても、「デ」を「カラ」に置き換えない限りは非文とされる。

主体が客体をトコロから別のトコロに移動させるというコトガラを表わす

場合、中国語においては、(5)のような状態表現であれば「在・トコロ」を用いることができる。これに対し、日本語においては(5)′のような「トコロ・デ」を用いた表現は成立せず、(5)′のような「トコロ・カラ」を用いた表現としなければならない。1.2で述べたように、日本語の「トコロ・デ」が動詞表現に用いられるためには、動作が主体の意志によるものであり、且つ、一定時間継続可能なものであるという使用条件を満たしていなければならない。従って、「トコロ・デ」を用いた動詞表現は動作性が極めて強く、状態表現として用いられる可能性は極めて低いといえることができる。

主体が客体を捜すというコトガラを表わす表現において、主体がトコロに存在しない場合、中国語においては(6)、(22)及び(6)′、(22)′のように、「在」、「从」のいずれによってトコロを示すこともできるのに対し、日本語においては、(6)′のような「トコロ・デ」を用いた表現は成立せず、(6)′のような「トコロ・カラ」を用いた表現としなければならない。(6)′は、トコロが動作の起点として表現されているという点では(22)と共通しているが、客体がトコロに存在するか否かが明白でないという点では(6)と共通している。(22)は、(6)に比べると、客体がトコロに存在するというニュアンスが強く感じられる。

## 〔注〕

- 1) この点については、平井勝利・成戸浩嗣「中国語の“在・トコロ+V”と日本語の“非トコロ+ニVする”表現の考察（一）」名古屋大学言語文化部『言語文化論集』第15巻第1号、1993年、171—172頁を参照。
- 2) 渡辺義夫「カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房、1983年、365—366頁。
- 3) 荒 正子「カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編、同上書、404—405頁。
- 4) 「出発点のむすびつき」については、荒、同上論文、399頁を参照。
- 5) 荒、同上、397、416頁。
- 6) 荒、同上、416頁。
- 7) 「取る」をはじめとする「とりはずし場所のむすびつき」をつくる動詞について

- は、荒，同上，417頁を参照。この種の結びつきについては，さらに奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編，前掲書，31-33頁を参照。
- 8) この場合の「対象」とは，動作が成立するために必要な成分を指す。
- 9) 「とりはずし場所のむすびつき」をとる名詞と動詞との組み合わせは，奥田，前掲論文，27-28頁のいう「とりつけの結びつき」の場合とは反対方向の動作を表わすが，名詞が表わすトコロがコトガラの成立に直接的に関わるという点においては，「とりつけの結びつき」における非トコロと同様である。
- 10) 荒，前掲論文，398-399頁。
- 11) 「とりはずし場所のむすびつき」との共通点，相違点については，奥田，前掲論文，33-36頁，荒，前掲論文，417-418頁を参照。
- 12) 荒，同上，410頁。
- 13) (9)，(10)はいわゆる多義文である。この点については，中川正之「中国語と日本語——場所表現をめぐる——」『講座 日本語と日本語教育 第12巻 言語学要説(下)』明治書院，1990年，237頁，平井勝利・成戸浩嗣「日中両言語におけるトコロ表現の使用条件」名古屋大学言語文化部『言語文化論集』第14巻第2号，1993年，4，39頁を参照。
- 14) 平井・成戸，同上論文，4-6，9-12頁。  
平井・成戸，前掲「中国語の“在・トコロ+V”と日本語の“非トコロ+ニVする”表現の考察(一)」176頁。
- 15) 中川，前掲論文，235頁。
- 16) この点についてはさらに，渡辺，前掲論文，361頁を参照。
- 17) 「電話をかける」が「何をかけるのか？」に対する返答として用いられることはないという点からも，このことは明白である。
- 18) 中川，前掲論文，234頁。
- 19) 范继淹「论介词短语“在+处所”」『语言研究』1982年第1期，81頁。
- 20) 「在・トコロ」を用いた動詞表現が，主体の意志によらない動作を表わす場合に用いられる例としては，さらに「你的事情我在寺院楼上看得清清楚楚(あんたのことは，お寺の上カラはっきりと見えていたよ)」が挙げられる。
- 21) 例えば，「在手里端了半天，也找不着地方放」においては，「端」が全く方向性をもたないことが明白である。
- 22) (4)，(20)の「抓」も「取る」という概念を表わし，「拿」と同様に方向性が強い。
- 23) (32)と同様の表現としては，例えば，「他在口袋里拿了十块钱，就跑出去了」が挙げられる。この場合，「彼が他人のポケットを探ってお金を取り出し，そのまま

ま走って逃げた」というコトガラが想定される。

24) 但し、主体がトコロに存在する場合はこの限りではない。

25) 西横光正「現代中国語介詞研究（一）」『語学研究』（拓殖大学）68，拓殖大学，1992年，98-99，106-107頁。